

唯物論における哲学の問題

——唯物論的弁証法の体系への手引——

加藤 正

唯物論——といつても、マルクスとエンゲルスにはじまる現代唯物論のことであるが、この唯物論、すなわち弁証法的唯物論では、哲学はどういう地位をしめるか、また哲学にはどんな対象がのこされているのであるか、それを考えてみよう。

この問題において基準となるのは、エンゲルスが『反デューリング論』の第一章、または『空想から科学へ』の第二章でのべている考かんがである。すなわち、現代唯物論は本質上弁証法的である。つまり、個々の科学のすべてが、今では、もろもろの事物とその知識を全体関連の下に明かにしようという要求を含んでいるのであって、その諸科学の成果を『現代唯物論は總括している』のであるから、もはや個々の特殊科学の上に立つて、それらの内面的関連をさぐるうとする哲学、または『全体関連そのものに関する特殊科学は、すべて無用となる。その場合にもなお従来の哲学全体の中で、哲学として独立にのこるのは、思考とその法則に関する教科——形式論理学と弁証法である。その他のものは、すべて、自然と歴史とに関する実証科学（積極的な知識）に解消する。』これと同じことを、エンゲルスはまた『フォイエルバッハ論』の第四章の結論でのべている。曰く『要するに、どこにおいても、もう頭の中で関連を考え出すべきでなく、事実の中にそれを発見すべきである。その場合、自然と歴史から追い出された

哲学にのこされているのは、純粹思想の領分（そういうものがまだのこっているかぎりにおいて）、すなわち思考行程そのものの諸法則に関する教科、論理学と弁証法だけである。』

哲学は実証科学に解消する。哲学は「止揚」^{しやう}されて実証科学となる。これが、すべての観念論者をいきどおらせ、すべての折衷的俗学者をかなしませたエンゲルスの考^{かんがえ}である。『空想から科学へ』の普及版をあんたドイツのドゥンカー博士は、どちらかといえば俗学者肌の人だが、右の箇所にあわてて次のように註をつけている。『エンゲルスがここで排斥（―）しているのは「従来」の哲学、つまり形而上学的哲学である。「弁証法」、したがってまた（―）「弁証法的唯物論」は哲学としてのこると、エンゲルスみずからいうている。おまけに、哲学を世界観と言い直せば（―）、マルクス主義の世界観の核心としての唯物史観を、マルクス主義哲学とも呼べることはもちろんだ。』

エンゲルスが排斥しているのではなくて、事物とその全体関連が実証科学的に明かにされる以上、もはや哲学がはいりこむ余地がなくなつて、自分からいわば死滅するのである。こうして明かにされた成果を『總括している』のが、『本質上弁証法的である』ところの現代唯物論、すなわち「弁証法唯物論」である。それは、エンゲルスによれば（『反デューリング論』第十三章）、『もはやどんな意味でも哲学ではなくて、単純な世界観である。』この「単純な」の意味はすぐあとでのべるが、とにかく、ドゥンカー博士がなんと言おうと、エンゲルスが「弁証法的唯物論」を哲学とも、マルクス主義哲学とも呼ばなかったことはたしかである。哲学は解消し、止揚^{しやう}されて、もはや哲学ではないところの、実証科学（積極的な知識）の總括としての弁証法的唯物論にとつてかわられる。その場合にも解消されずに哲学としてのこるのは、自然でも歴史（社会）でもなく、一般に現実の存在の世界には含ませることのできない純粹思想（思考行程そのもの）を対象とする科学、論理学と弁証法である。つまり、エンゲルスは、思考の法則に関する科学としての「弁証法」（および形式論理学）だけが哲学としてのこるとは言ったが、「弁証法的唯物論」が哲学としてのこるなどとは、どこにもいうていない。もはや哲学ではない、単純な世界観、諸科

学の總括としての弁証法的唯物論を、哲学（思考法則の科学）としての弁証法と同一に考えるのは、エンゲルスに關係のない、ドゥンカー博士の獨断である。

しかし、こういう獨断は、このドイツの俗学者のみでなく、マルクス主義的哲学著述家のほとんどすべてが分け持っていて、こういう獨断に賛成しないものはかえって仲間はずれにされるほどである。わが国におけるそれら著述家を代表する一例として永田君をとつてみよう。『唯物論研究』第五四号で同君は、現代唯物論が「一つの單純な世界觀」であることをパラフレーズして、『世界の一般法則の理解、すなわち一般的・抽象的規定性における世界の理解、すなわち弁証法、一個の科学、哲学的科学』とのべている。しかしながら、なにもかも直觀的にいっしょくたにしてしまふ立場をこえて、分析的に考えをすすめてゆく道をとらなければ、唯物論における哲学の問題を正しくもりあげてゆくことはできない。ここでは、まず、單純な世界觀としての現代唯物論と、思考法則の科学、哲学的科学としての弁証法（および論理学）との間のけじめをつけることが、問題にとりかかる第一歩となる。

永田君のパラフレーズを見ると、エンゲルスのいう「一つの單純な(einfach)世界觀」の意味がひどく誤解されているのがわかる。『反デューリング論』のその箇所をよく研究してもらいたい。ここでエンゲルスが「單純な」というているのは、一般的抽象的などという意味でなく、世界（自然と歴史）を把握するのに哲学と科学の二本立てでこうとする「重複した」世界觀に対して、実証的な科学一本に統一された「一重の」世界觀、なんら神秘的な觀念的な不自然な加工のあとのない單純な世界觀という意味である。抽象的な世界觀ではなくて、『現実的な内容』を『現実的な科学』が明かにするがままの形式で包含する具体的な世界觀、言いかえれば、諸科学の弁証法的（というのは、諸科学がみずから明かにする関連をたどつての）總括である。これが『一個の科学、哲学的科学』としての弁証法とまったく別の概念であることはいうまでもない。

註

以上のべた『反デューリング論』第十三章のその個所については、エンゲルスの草稿が残っている。両者を比較しておく。

正文 Dieser (der moderne Materialismus), die Negation des Negation ist Es is eine einfache Weltanschauung, die sich in den wirklichen Wissenschaften zu bewähren und zu betätigen hat.

草稿 Die Negation der Negation ist der moderne Materialismus, der im wissenschaftlichen Sozialismus seinen theoretischen Abschluss findet. Marx Engels Archiv Bd. II, S. 412.

「単純な世界観」を、弁証法、一コの哲学的科学などと、あほなことをいう永田君は、「その一コの哲学的科学」の Abschluss が科学的社会主義（プロレタリアートの解放の意義条件に関する科学）であるなどという珍命題を証明してみるがよい。

ところで、ここにもう一つ問題がある。世界観としての「弁証法的唯物論」と、哲学としての「弁証法」との区別はそれでよいとして、エンゲルスにはこの外に「弁証法」のもう一つ別の定義がある。それは、自然、人間社会（歴史）、思考のすべての運動に対して、ひとしくあてはまる「ごく一般的な運動法則、発展法則の科学」としての弁証法という定義であって、これについてはエンゲルスは、哲学だとも、哲学的科学だとも、哲学としてのこのものだとも、なんだともいうていない。エンゲルスによると（岩波文庫『自然弁証法』下八一頁）この「一般的運動法則」は、現実世界（自然および人間社会）から引きだされたもので、大体において、質と量の相互転化、対立の統一、否定の否定という三つの法則につづめて言いあらわすことができる。さきの永田君のパラフレーズにおける『世界の一般法則の理解』というのがまずこれにあたる。

この「一般的運動法則」とは、そもそもなにものであるか。これについては、あとでくわしくのべる。ただ、いずれにしても、この二つの「弁証法」が概念の上では二つの別なものであることは、注意しておいていただきたい。

この二つを直観的にいっしょくたにしてしまう立場では、唯物論における哲学の問題を正しくもりあげてゆくことはできない。世界観としての唯物論と、思考法則の科学としての哲学とを同じに見ただけでなく、さらにそれらとここにのべた世界の一般的運動法則とをならべて、この三つを同一の概念としてパラフレーズした永田君は、またしても十分批判的に考えていないという過あやまちをおかしたことになる。

つぎにうつるまえに、ここで私はひとつおこわりをしておく。私はこの論文でしばしばマルクス、エンゲルス、レーニンの考かんがえを引いて話をすすめる。これはただ問題のりんかくを諸君の目の前に直観的に描き出すのに便利だからであって、それによってなにかを証明するためではない。一步一步事実的に証明しつつ体系的な形で展開することは、こんな小さい論文ではできるはずもない。哲学という一つの科学を建設するのに絶対に必要なこの道行みちゆきを、私もまた現代の流れにしたがつて忘れていたのではない。ただ、この論文が、さしあたり、人々をその科学の建設の戸口へ手引するだけの目的しかもっていないために、わざと通俗的な手軽な形をえらんだまでである。

二

まず、二つの別な概念として区別した、世界観としての弁証法的唯物論と、思考法則の科学としての哲学との間の関係からしらべてゆこう。だが、そもそも唯物論とはなんであるか。エンゲルスは、これについて、すでに古典的となった定義をあたえている。すなわち、思考と存在、精神と自然との関係の問題は、哲学全体がとどのつまりはそこへ尻をもちこまねばおさまりのつかない最高問題であって、思考に対して存在を、精神に対して自然を本源的なものとするのが唯物論（その逆が観念論）である（『フォイエルバッハ論』第二章）。つまり、ここでは唯物論が単に哲学上の立場として定義されているように見える。

しかしながら、論争問題として哲学の舞台でとりあつかわれるということは、それが哲学だけにおわる問題だとい

うことではない。こういう哲学問題をもち出すのは、いうまでもなく思考自身である。思考が自分にむかつて、自分が本源的なのか、それとも自分の目のまえにある対象的存在が本源的なのかとたずねているのである。なぜそういうことを問題にするかといえば、思考が対象的存在をこえた超自然的なものの中に、あるいはまた自分自身の中に本源的なものをみとめてその立場（これはつまるところ宗教的信仰に一致する立場だ）から存在にのぞんでいたのが、存在の世界が多様な展開をもってせまってくるにつれて、それをそのままにみとめること、それを本源的とみとめ、それ自身の中にある理由によって存在するものとして受入れまた取上げることがどうしてもさけられなくなる。それどころか、そのときには宗教的信仰に足場をもつ思考のそとに、対象的存在をそのままにみとめ、それに合わないような、自分ひとりで作らあげた観念はうちすてようと決心している思考が、すでに大きな地歩をしめているのだ。これがつまり現実的な科学である。

したがって、観念論か唯物論か、思考と存在、精神と自然のいずれが本源的かという哲学問題は、宗教、神学、または観念的知識と科学とのあらそいである。科学が自己の立場を反省し意識しつつ、それらに対して対決をせまる形がこの哲学問題である。思考に対して存在が本源的であるという結論によって、この問題はおわる。そしてこの結論は現実の実証的の科学の中に実現されている。唯物論というのは、単にこういう結論を証明するための哲学的議論にすぎないのであるか。それともこの結論を「実現」しているところの思考の形態をこそ指すべきではないのか。もちろん後者である。この結論を実現している唯物論的思考行程は、現実的形態においては積極的な経験的知識、すなわち実証科学である。これは思考が対象的存在を本源的なものとして、したがってそれ自身においてあるがままに把握した形態である。それが唯物論である。把握された内容から、把握する形式、思考行程それだけを一応ぬき出して議論の対象とすることができる。それが「思考の法則の科学（弁証法）」としての哲学である。しかしながら思考は唯物論的立場においてのみ運動するのではない。観念論的立場においても運動する。そして宗教、神学、

観念論哲学その他の形態をとる。また、弁証法的にのみ運動するのではなく、形式論理学的にも現象する。そして形而上学その他の形態をとる。思考の法則の科学として生きのこる哲学は、思考の唯物論的弁証法的展開を明かにするばかりでなく、形式論理学から弁証法への止揚しやうのモメントを、また観念論的思考から唯物論的思考への止揚しやうのモメントを、さらに唯物論的思考から観念論的思考への「疎外」のモメントも明かにしなければならぬ。したがって、思考法則の科学（弁証法）としての哲学は、観念論か唯物論かの問題を自分の中にふくむ。

唯物論というとき、たいていの人は哲学議論を連想する。しかし、唯物論には内容も形式もある。形式の面だけで抽象して哲学とのみ見るのはまちがっている。それには内容の面がある。すなわち実証科学としての面である。同じような関係はほかにもある。「かんがえ」ということばをとってみる。これは考えられた内容をさすのか、それとも考えるという精神のはたらきの形式をさすのか。後者の面だけを指すのではないことは明かだ。認識だとか、世界観だとか、およそ意識や思考に関係のあることばをとってみると、みな同じことがいえる。古くは「こと」が同時に事であり言（葉）であったという。唯物論は「思考の立場」を意味するだけでなく、その立場で把握された内容を意味する。エンゲルスは、さきにのべた定義を説明した少しあとで、『観念論体系もますます唯物論的内容にみだされ、……ヘーゲルの体系にいたっては、まさに方法および内容の上からいつて観念論的に逆立した一箇の唯物論をあらわしているにすぎない』とのべているが、これはエンゲルスが、たとえ観念論のわく（体系）の中にはいつていても、その内容がそれ自身にあるがままにとりあげられているかぎりは、そのかぎりにおいて唯物論とみたこと、つまり唯物論を内容的に考えていたことを示す。エンゲルスはさきの唯物論の定義をさらに展開して、これもまた古典的といえる第二の定義をあたえている（『フョイエルバッハ論』第四章）。すなわち、現実の世界（自然と歴史）を、成心なくとらえること、『それ自身の関連において（空想的関連においてでなく）とらえられた事実と一致しない観念論的妄想は、容赦なくほうむること』、唯物論とは要するにただそれだけのことであって、マ

ルクスとエンゲルスの現代唯物論の場合は、『ただ唯物論的世界観がはじめてほんとうに真剣にとりあげられ、知識のあらゆる分野に首尾一貫的につらぬかれたにすぎない。』ここでは世界観ということばがどちらかといえば見られた内容よりも見る形式の意味で使われている（もちろん必ずしもそうきめてしまうほどのこともないが）のに対して、現代唯物論がその内容の方面から特色づけられている。

これまで唯物論といわれたものは、ギリシアの唯物論でも、十八世紀のフランス唯物論でも、決してこの派の代表者たちが思考と存在の哲学問題を論じたり、存在を本源的とみる認識方法を論じたというだけの意味でいわれているのではない。むしろ、なによりもまず、彼らがこれまでの宗教的神学的世界説明からはなれて、存在を、自然を、それ自身の原因から、それ自身の法則によって、超自然的な原因と独立に把握してみせた、その成功的な成果によって唯物論といわれているのである。彼らの唯物論が普通に自然科学といわれるものとおもむきがちがって、哲学としてうけいれられているのは、個々の経験科学が世界の個々の現象、個々の行程をとりあつかっていた間に（というよりも、そういうものをしかとりあつかえなかつた間に）、彼らがやはり科学の個々の成果によりながらも、世界の全体図、自然的存在の「体系」、世界観を提供した点にあつた。一般に、科学は個々の分野の特殊法則を対象とし、哲学は全体としての世界の一般法則を対象とするという常識的な区別がまだ通用する時代だったのである。もちろん、彼らの世界観は、観念論者の体系とちがって、自然をそれ自身で独立に存在するものとしてあつかつてはいるが、関連が現実的に発見され、実証科学的に説明されていなかつたかぎり、全体図をまとめあげるためには、いきおい直観的に既知の關係に還元したり、連想的に空想的な仮説をとりいれたりすることはさけられなかつた。そういう意味では、唯物論の世界観と、経験科学との間にはいく分か質的な区別があらわれており、唯物論は多かれ少かれ「哲学的」体系だつた。しかし、それにしても、一方個々の経験科学上の理論が、その分野においての正真正銘の唯物論であることはまちがひなかつた。ところが、いまでは様子がかわつている。個々の実証

的な経験科学が、いまでは個々の分野の個々の事物や行程ばかりでなく、それらの間の関連をも大体において明かにしている。したがって、諸科学の成果をそれ自身の関連において結びあわせてゆけば、世界の全体図はひとりで出来あがるようになっていく。科学が世界を全体としても明かにする以上、個々の特殊分野を対象とする科学とは別に、全体を対象とする特別な科学としての哲学などがありうるわけがない。哲学は科学に解消したのであって、ここにのべたような哲学と科学の区別は、もはや成り立つことができなくなっている。人々はともすればこの点を忘れたがるので、特に強調しておきたい。

二（つづき）

弁証法的唯物論が、実証的な諸科学の總括であるというとき、個々の内容からいえば個々の科学の成果そのものにほかならないことは、もはや誰にも疑問の余地はあるまい。しかし、全体というところへピントをあわせてみると様子がかわってくる。個々へピントをあわせると、全体がぼける。全体にピントをあわせると、個々がぼける。個々の場合にとつて實際上重要な要素も、全体関連を明かにする上からはひとまず無視されることもありうる。總括ということばそのものにも二様の意味がある。一つは具体的全体の意味で、科学のすべての内容をそれ自身の関連をたどつてことごとく結びあわせてゆくやり方。もう一つは抽象的全体の意味で、全体に結びつく関連のすじみちだけをとり出すやり方である。後者はただ前者の抽象、あらまし、指標、サンマリ、であるにすぎない。後者はただ一定の目的にそうために、持ちはこびの便利なように前者から抽象されて手ごろに仕立てあげられたものにはすぎない。抽象的であればあるほどまとまりもよい。前者は一度に完成した体系として示されることはありえない。時代とともに限りなく具体化してゆく体系である。それにもかかわらず、後者は結局前者に合致すべきものであり、前者に統一さるべきもの、前者に統一されてのみ意味のあるものである。そればかりでなく、具体的にもせよ、抽

象的にもせよ、科学の總括はあくまで科学である。總括によつて得られた全体に関する一般的抽象的な把握を、科学と区別して哲学とよぶ理由は少しもない。全体が個々物のそれ自身の関連において總括される以上、そこになんの観念的な超科学的なものも持ちこまれていないからである。それにまた、全体が個々の部分のそれ自身の関連において總括される以上、總括はそのままではなんら抽象化を意味しない。總括によつて全体をつらぬく一般法則をあきらかにすることは、なんら抽象化ではない。總括によつて具体化される全体から、そういう一般法則を、いわば結論的に、抽象することができるといふだけである。具体的なものは個々の特殊なものであり、全体的一般的なものはいつでも抽象的なものと考えるのは、形式論理学または形而上学的思考のわるいくせである。

科学は対象を個別的特殊的に研究し、哲学はそれ等の成果にもとずいて対象を全体的一般的に研究するというような常識的形而上学は、常識的であればあるだけ俗学意識にはうけいれられやすいが、弁証法的唯物論の中へはいりこむ余地はない。物理学があらゆる現象にわたつてそれぞれのエネルギーの当量を測定したのち、エネルギー保存則を証明したとき、この一般的結論を論議するのは、もはや物理学でなくて哲学なのであるか。歴史科学が歴史を研究しなおして、生産力と生産関係の相互作用の中に歴史の基礎をみとめたとき、この一般的結論はもはや歴史科学から哲学の中へ聖別されたのであろうか。一体、科学はどの程度に抽象され、どこまで全体化し一般化されたなら哲学となるのか。マルクスは経済現象をつぶさに研究して、一般的な価値法則にもとずく資本主義社会の全体としての経済的運動法則をあきらかにした。彼の『資本論』は、弁証法的總括がなんら抽象化を意味しないで、具體的全体、具體的一般性を示す一例である。レーニンは『カルル・マルクス』の中で、「マルクスの経済学説」を三百分の一くらいにちぢめて、その骨子を示したが、その場合、マルクスは経済学者であり、レーニンは哲学者としてあらわれているのか。そもそも哲学というのは科学のサンマリーをつくる仕事なのか。こういう問題設定のばからしさがわかったら、われわれは「哲学とは全体観である」という俗説をすてて、哲学の対象を別のところから

めねばならない。その対象こそは思考行程そのものである。

科学の總括の中から、それだけ独立して抽象的にとり出された一般的結論は、形の上からみれば、これまで哲学が現実の中へもちこもうとしていたところの諸原理によく似ている。科学の一般的結論、科学上の一般命題をうっかり哲学とよんでいるのも、それからの連想であろう。しかし、科学の總括、その一般的結論はあくまで科学であつて、哲学ではない。マルクスおよびエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』第一編の中で、歴史科学（歴史の唯物論的把握）の一般的結論について大要次のようにいうている、『思弁のやむところ、すなわち現実の生活に面すると、人間の実践活動の説明としての現実的実証的な科学がはじまる。現実が説明されるとともに、独立な哲学は存立の土台を失う。それに代るものといえば、せいぜい現実の歴史の観察から抽象されるごく一般的諸結論の總括くらいなものである。しかも、それらは哲学のように歴史を整形する図式ではなく、歴史的素材を統一したり秩序づけたりする手引となるだけにすぎない。しかも、そうして過去現在の時代の現実的な説明をくわだてるとき、始めて困難があらわれてくるのであつて、この困難は各時代の現実的な生活行程や諸個人の行動を研究してみても、その諸前提が明かになつたときはじめて克服されるのだ。』現実が唯物論的にあるのままに説明されれば、哲学はそれに止揚しやうされて、哲学としては消滅する。哲学のかわりに、それに似たようなものを求めれば、それはもはや哲学ならぬ「科学の一般的結論の總括」にすぎない。それは現実の中へもちこまれる原理ではなくて、現実から抽象された原理であり、「せいぜいそれくらいな」意味しかもたないものである。マルクスおよびエンゲルスは、それらの抽象物、一般的諸結論を、哲学にとつてかわるもの、哲学の代替品とは言っているが、哲学だとはよんでいない。まして、独立なものとしての従来の哲学にかわる新しい意味の哲学などとは、どこにも言っていない。『ドイツ・イデオロギー』の第一編は、そういう「抽象物（すなわち唯物史観の一般的諸結論）の若干を歴史の実例によつて解説」したものであつて、それはまたエンゲルスが後年『フォイエルバッハ論』の第四章で若干の例をそえて示した

「マルクスの歴史観の一般的なりんかく」と同じものを意味している。エンゲルスがそこで強調しているのは、この唯物論的歴史観（歴史の実証科学）が哲学を解消させたということと、哲学には思考行程の法則だけが対象としてのこされるということである。にもかかわらず、永田君は同学の人々を代表して、かの抽象物を「新哲学、科学的な哲学の提唱」とよんでいる（同君著『現代の唯物論』）。つまり、マルクスとエンゲルスは『具体的な科学研究からの「一般的結論の總括」であるが故にかかる具体的研究に方法論として役立つ科学的な哲学を提唱する。それが外ならぬ唯物弁証法であり、歴史への適用においては史的唯物論である。』また曰く『弁証法的唯物論——新哲学——現実の科学的認識の方法』と。

『ドイツ・イデオロギー』のその箇所では問題となっているのは、史的唯物論（唯物史観）の一般的結論のみであつて、それ以外のものではないことは別としても、永田君はここで認識の方法ということばを不用意につかう過あやまちをおかしている。あらゆる知識は、具体的であれ、抽象的であれ、特殊的であれ、一般的であれ、それぞれの目的に応じてみなそれぞれに新しい知識を獲得する出発点、よりどころ、類推物、手引、暗示、等々として役立つ。だからといって、方法でも哲学でもありはしない。問題は、そういうものを手がかりとして、対象そのものをつかむことにあるのであつて、思考にそういう「つかみ方」を教えるのが認識の「方法」である。それは概念のあつかい方を示すものであり、思考行程の分析を前提とするものであつて、これこそが本来の哲学の問題にぞくするのだ。唯物史観の一般的諸結論も、それが一般的な結論であつてみれば、歴史的素材をしかるべき秩序にあんばいするといふ目的に応じて、暗示や手がかりにはなるだろう。だが単に「それだけにすぎない。」そんなものを方法論とよび、ましてや新哲学とよぶつもりは、マルクスにもエンゲルスにもなかったであろう。彼等は、そういうものを手引にして現実の歴史の行程そのものをあたらしく明かにしようとするとき、そこに始めて認識のほんとうの困難があらわれることを忘れていない。方法論というのは、そういう困難をときほぐしてゆく研究の手つづき、思考のあやつり

方に関する教科である。であつてこそ始めてそれは哲学の一分科なのだ。そして、それについては、『ドイツ・イデオロギー』にはまだなにも言われていないのだ。

註

ここを書いているとき、うっかりして、経済学批判の序文と、エンゲルスの「経済学批判」評論を引合ひに出すのを忘れていた。あとで気がついて、三三三頁以下〔18頁〕以下へおりこんだので、そちらの方が少し説明が煩雑になった。

永田君たちは、科学の一般的結論（の總括）だと言えばすぐに哲学だという。研究の手びきになると言えばすぐに方法論だという。そういうドグマで頭がカチンカチンになっているから、ドイツ・イデオロギーのここに引用された句から、一般的結論の總括という「文字」を見ると、早速新哲学、唯物弁証法の提唱だと感じがいしてしまう。

『歴史への適用においては唯物史観である』ところの『唯物弁証法』など、ここには少しも説明されていない。マルクス・エンゲルスが「方法論としての唯物論的弁証法」を始めて語ったのは、『経済学批判』評論』においてであつて、そこでは、唯物史観をも含めてではなく、それと区別し、それとならべて、思考の展開の形態として語られている。

三

実証科学的知識は、具体的、抽象的、記述的、説明的、個別的、全体的、一般的、總括的、その他どんな形態でもとることができ、目的におうじてどんな形態でもとらせることができる。しかし、どんな形でもとりあげられても実証科学は実証科学であり、唯物論的認識である。つまり唯物論そのものである。そして、その行程があらゆる形

態における実証科学（唯物論）としてあらわれるところの唯物論的思考そのものに関する科学が、独立な一箇の科学としての哲学（弁証法）である。後にのべるように、観念論的思考は、この唯物論的思考の限定、変形、疎外として示すことができる。要するに、科学においては思考は存在（現実の世界）を対象とし、哲学においてはその思考が自分自身を反省し、自分自身を対象とする。存在を対象とするのが科学で、この科学を対象とするのが哲学である。これが、唯物論（実証科学）と、独立なものとしてのこる哲学との一般的関係である。

こうして哲学としての弁証法は、思考の全行程、思考の展開の全範囲を対象にもつことになり、それ自身一箇の科学として、科学に固有な発達の道をとる。すなわち、始めにあらゆる思考現象、思考規定、思考行程の諸側面が個々にとりあげられ、整理され、分類され、評価され、それがつもつて次第に一箇の全体図に綜合されてゆく。いわば「思考に関する実証科学」として、あらゆる思考現象、思考規定が実証的に研究されることによって、「独立なものとしてのこる」べき哲学が作りあげられていったのである。この経過をくわしくのべることは、ここではさしひかえなければならぬが、ただちよつと二三の点を指摘しておこう。この科学は元来アリストテレスにはじまると言つてよい。もちろん、そこに前史がなかったということではない。アリストテレスは、思考がもつとも「典型的に」形成されている言語と議論の分野を主な手がかりとして思考現象を解剖した。マルクスが資本主義社会を解剖するにあたって「典型的な」イギリスを標本にしたようなものだと思えばよい。アリストテレスの明かにした思考法則は形式論理学とよばれるが、単にそれだけでなく、弁証法へもふみこんでいる。近世になって、いわゆる合理論者は弁証法的な思考形式をかなり明かにしたが、神学に由来する形而上学的実体（思考の規定をそのまま実在の規定として対象化したもの）のわくから思考をすくい出すことができなかつた。経験論者の方は、思考が現実の諸現象の概念的処理という形で展開する側面をあきらかにしたが、思考にそれ自身の規定、それ自身の法則があることはピンぼけにされてしまった。これらの事情をカントが克服した。カントはアリストテレス以来の思考の論

理的規定を現実、存在、感覺的所与の思考的処理の形式、認識の規定として関連的に明かにした。初学者をまごつかせるカントの「先験的」という觀念は、要するに思考は現実的対象の認識という形で展開するが、その展開には「それ自身の法則がある」ということにほかならない。カントは経験論がばかしてしまった思考そのものの法則をあきらかにしたが、それはあくまで対象の把握の規定なのであって、対象の把握としてでなしに、合理論者のやっただよに自分だけの中でその規定をくりひろげれば、同時に相反対する結論をしぼり出して自己矛盾に陥るという結果になる。ところが、ヘーゲルはさらに一步をすすめて、互に反対な主張にわれて矛盾するというのが思考の本性であつて、対象のさらに一層高度な把握がおこなわれると、矛盾はそこへ解消（止揚）されることを明かにした。いや、もっと正確に言えば、ヘーゲルはこの事情を逆にとつて、思考は自分のおちいる矛盾を止揚すること（つまり弁証法的運動）によつて対象のさらに一層高い把握を達成するという風な形で明かにしたのだ。こうして弁証法は思考の根本法則となり、思考による存在の把握の全範圍が一箇の弁証法的展開のもとに總括的に示された。これはヘーゲルの不朽のてがらであつて、哲学の完成者と言われるのも理由のないことではない。しかし、実をいえば哲学はまだヘーゲルにおいては完成していないのだ。最後のひと仕上げがのこっている。つまり、思考のおちいる対立的矛盾は、思考の外にある現実を自己の中へ把握することによつて止揚されるのであって、思考が自分の中から矛盾を生み出し、自分の中からこの矛盾を止揚し、それによつて「現実の把握」なるものが達成されるというのでは、思考が自分自身の中から現実の把握された現実（または把握された現実）を生み出すのだということになる。思考の内部から展開するものとしての現実とは、思考の外へ、それ自身においてあるものとして解放しなければならぬ。そうすると、把握された現実の含む諸規定は、すべてが思考から展開された規定ではなくて、現実そのものの規定と、思考そのものの規定（概念の諸形式）とに分析される。そして、思考そのものに固有な規定だけを独立に実証的にとり出して、その弁証法的な展開を研究すること、つまり思考の法則を研究することだけが哲学にのこ

され、思考が自己の法則にしたがいながら実際に現実を対象的に把握または認識してゆくことは、すべて実証科学の仕事となる。いわば、現実の把握（認識）としての思考（弁証法）に関する哲学は、ヘーゲルの形態からさらに一歩完成に近づけられることによって、必然的に止揚しやうされて実証的諸科学に解消するとともに、哲学そのものとしては、多くの科学の中の一つの科学、現実でなく思考そのものを対象とする特殊な一つの実証科学に還元される。この哲学が、これまでのべたところからして、つまり哲学史の結論として、当然どんな内容をもつべきか、その概要を示すまえに、いま吾々の前にはもつと整理しておかねばならぬ問題がある。

哲学の対象は「全体としての世界の一般法則」であるという見地に立つと、思考のもつとも本質的な規定としての把握または認識という側面が失われる。そこで哲学の対象を完成するために、外的なものとして疎外された認識行程、すなわち思考と存在の関係の問題を別個の道からとりいれなければならない。正直な永田君はこの問題をごまかさずにとりあげている。そして失敗している（『唯物論哲学のために』第一論文の二）。同君によると、特殊法則の概括によつて一般法則を抽象することは、個別科学的認識の成果の比較対照によつておこなわれるものであつて、かく認識と認識の比較が問題になるや否や、当然に、認識とは一般に何であるかという問題、つまり思考と存在の関係の問題がおこるのだそうである。個別科学において理論的問題になりえなかつたこの問題が、ここ哲学においては反省の対象となり、理論的課題に高められると。しかしながら、われわれは、唯物論の主張が認識成果の比較においてでなく、思考が現実に直面するところにのみおこることを知っている。個別科学、実証的諸科学こそ、「当然に」思考と存在の問題を理論的によびおこした御当人である。現実に直面する科学者の頭の中では、この問題は多かれ少かれ唯物論的に自覚され解決されている。そして認識と認識の比較、認識成果の理論的加工においてはじめて観念論的解決がはいってくる。個別科学「において」この問題が理論的問題とならないのは、わかりきつたことである。それは現実を対象とする学問であつて、そういう問題を対象とする学問（哲学）ではないからであ

る。だがそれと同じように、世界の一般法則を対象とする「哲学」にとつては、たとえそれにつれてそういう問題がおこったとしても、それがそういう「哲学」の中に対象として含まれることはありえない。そういう意味で、この「哲学」は限界のはっきりした対象をもっているし、思考行程の科学としてのほんとうの哲学は、思考の全範囲を概念の一箇の弁証法的展開として示すという限界のはっきりした対象をもっている。前の「哲学」から後の哲学を弁証法的に展開することは、できない相談だ。では、この問題はどうか解決すべきであろうか。哲学の対象としての「全体としての世界の一般的運動法則」という観念は、ひところのソヴェトの教科書に出てくるもので、永田君はじめ、わがおおかたの同学諸君が受けいれている観念である。前節で私は「科学の一般的結論の總括」はやはり科学だ、哲学でない」と説明した。実をいえば、ここに言う「世界の一般法則」と、マルクスおよびエンゲルスが哲学のかわりになるものとしての「科学の一般的結論（諸成果）の總括」と言つたものとは、少しちがつている。ここに言う世界の一般法則とは、単なる總括や一般化の成果でなく、現実的な内容のあとを少しも残さないように抽象化してしまつた運動形式の規定、すなわちエンゲルスが「自然、社会、思考の、一般的な運動法則の科学」として定義した弁証法の諸法則、対立物の統一、否定の否定といったような法則の意味でのみ言われているのである。このことは既に第一節でふれた。そして、この弁証法をエンゲルスは哲学だとも、哲学としてのこの弁証法だとも言っていないことをのべた。ついでに言えば、従来の哲学にかわる代用物だとも言っていないのである。エンゲルスは、思考法則の科学として独立にのこる哲学の意味での弁証法と、一般的運動法則としての弁証法と、この二つの定義による弁証法、つまり弁証法の二つの概念を、それぞれの場所でかなりはつきりと区別して使っている。

エンゲルスは、たとえば、哲学の対象としての弁証法については、『思考形式や思考の諸規定の研究』（岩波文庫『自然弁証法』下三三頁）とか、『概念そのものの本性の研究を前提とする』弁証法的思考（『自然弁証法』上一三七頁）とか、『思考の歴史とその諸成果との知識にもとづく理論的思考の一形態』（『自然弁証法』下四七頁）とか、『思

考の科学——人間の思考の歴史的発展の科学」、従来の哲学の研究によって開発し育てあげられる理論的思考（『自然弁証法』上二〇六・二〇七頁）とか、事実の弁証法的特質に対してあてはめられる『弁証法的思考法則の意識』、『長い経験的な歴史をもつ現実的な思考』とそれにもとづく『概念をとりあつかう技術』（『自然弁証法』下二三六頁または『反デューリング論』第二版序文）とかいうようなことばで、その内容のりんかくを示そうとこころみている。なおまたエンゲルスは、マルクスの『経済学批判』を評論した有名な記事の中で大体次のようにのべている。『マルクスはヘーゲルの論理学の中から、ヘーゲルの現実的な（実証的な）発見を含む骨子をひきぬき、弁証法的方法を観念論の衣裳をはいだ単純な姿、「思考の展開の唯一の正しい形式」をあらわす姿に作りあげた。マルクスの「経済学批判」の基礎にあるこの方法の作りあげこそは、唯物史観そのものにもおとらない重要な業績である。』唯物史観については、マルクス自身が『経済学批判』の序文で『一般的結論』をのべて、それが彼の『研究の導きの糸』となったと述べている。つまり、前節に引用した『ドイツ・イデオロギー』のことばをここにくりかえしているわけである。そこでは、この一般的結論が歴史哲学にかわって研究の手引、手がかりとなることが言われているが、永田君が歪曲したように、「方法論としての新哲学」とはみなされなかった。そして、このエンゲルスの評論においてはじめて、この一般的結論そのものとしてでなく、それと並ぶものとして、「弁証法的方法も」公に指摘されたのである。マルクス自身はそれを『資本論』第二版の跋で指摘した。そしてレーニンも『資本論（経済学批判）の基礎にある弁証法を資本論について研究することを熱心にすすめている。マルクスは『経済学批判』の印刷中に、いつか弁証法について書きたい希望をもらしているが、ついにその機会はなかった。しかし、エンゲルスがその評論の中でごくごくつかいつまんでその方法のどんなものであるかを暗示してくれている。すなわち、まず事実の上に与えられている最初の最も簡単な関係をとりあげ、それを関係の両項に分解し、各項をそれぞれ研究してその相互関係の様式をあきららかにし、その矛盾対立が現実の上で解決されている様式を見出し、その解決としての新

関係についてそれを関係の両項に分解し、……といった要領である。だが、こういう暗示以上に、哲学の対象としての弁証法、認識論としての弁証法の問題をはつきりとわれわれの前に示したのはレーニンであった。これについてはまたあとでのべる。

以上の思考法則としての弁証法に対して、一般的運動法則の科学としての弁証法についてはどうであろうか。これはまた『諸関連の科学としての弁証法』（『自然弁証法』下八一頁）ともよばれている。これについてエンゲルスは、『その法則は自然および人間歴史における運動に対しても、思考の運動に対しても、ひとしくあてはまる』（『自然弁証法』上二一七頁）とか、生物界や、地表や、数学、社会、哲学、いずこにでも行われているあらゆる発展行程をこの一般法則の下に總括しても、それによってこの行程のそれぞれの特性を明かにしているのではない（『反デューリング論』第十三章）とか、行程を現実的歴史的に明かにしたのちに、それをさらにある弁証法的法則に従って起る行程として示すにすぎない（同上）とか、『ことばの上でそれ（弁証法がすべての世界にひとしく行われているという根本思想）をみとめるのと、実際に個別的にそれぞれの研究分野のすべてにわたってそれをつらぬくのととは、問題を別にして考えなければならない』が、この根本思想をのみこんでおけば研究の役にはたつ（『フォイエルバッハ論』四）とかのべている。これによってエンゲルスが「一般的運動法則」というものをどんな風に考えていたか、ほぼ想像できる。

この一般的運動法則としての弁証法こそは、われわれが弁証法に入門する際に、まず教えこまれる教科である。これをおしえるには、さしあたりそれ以外に方法がないのでそうするのだが、まず量の質への転化、対立面の統一、否定の否定の三法則、その他これに類する一般法則をならべて、そのうちどれか一つをとりあげ、自然科学や社会科学の手によって現実に明かにされた色々な現象をとらえてきて、これらがそれぞれの法則にしたがって起る行程であることを例証する。こうしてその法則がすべてにあてはまる一般法則であることを納得させる。しかしながら、

すべてを説明するものは、なにも説明しない。すべてが一般法則にしたがつて運動し発展することを納得できたところで、それによって現実の個々の発展行程のそれぞれの特性がなにより一つ明かにされたわけではない。それを明かにするためには、それらの行程をあらためて実証科学的に研究しなければならない。このとき一般法則をのみこんでおけば、たしかに役に立っただろう。一般法則に反するような結果を出せば、一応疑ってみることもでき、否定することもできるから。そして妙な結果を出して失敗した実例をいくつか並べあげる。およそこういったところで「一般的運動法則としての弁証法」の教科は卒業となる。もっともこれには補習科や専攻科もある。エンゲルスによれば、弁証法の一般法則はヘーゲルの示すように概念の自己運動の規定ではなく、現実世界（自然および人間社会）からぬき出されたものである（『自然弁証法』下八一頁）。そこで弁証法の専攻科生は、現実の科学の成果にもとづいて、つまり「特殊科学の諸法則の概括によって」、現実からもっと多くの、あるいはもっと深い、もっと具体的な一般法則をぬき出そうとつとめる。だがあまり成果はあがらない。どう工夫しても、結局はエンゲルスのあげた三つの法則から多くを出さない。レーニンも哲学ノートの中で「弁証法の諸要素」を列挙しているが、格別目あたらしい新法則は含んでいない。それに注意しなければならないことは、レーニンはヘーゲルの弁証法をいわば唯物論的に読みながらそれら諸要素をとり出したのであって、個別科学の特殊法則の概括などから抽象したのではない。そういえば、エンゲルスの三法則だとて、やはりヘーゲルの論理学からぬき出した骨子であって（『自然弁証法』下八頁）、例証的に自然、歴史、思考の一般法則として示されているにすぎない。最後にレーニンが手びかえした「諸要素」には一般法則とならんで、思考法則、認識法則の諸要素が混入している。

専攻科生の努力が大して実をむすばないのには、ちゃんとしたわけがある。実はすでにもう暗示したように、世界の一般的運動法則というのは、思考行程の法則の一側面、現実世界の運動との同一性という面で抽象された思考法則にすぎないのである。思考法則がその思考法則としての本来の姿から抽象され、現実の上へ投影され、現実世

界の法則として直観化され、固定化されたものにすぎないのである。どうしてそういうことになるかといえば、思考行程というのはすでに見たように概念による現実の把握、つまり認識の行程なのであって、概念の展開は現実の行程によって決定され、それを反映するわけなのであるが、把握の成果は現実の展開を概念の展開という形式で表現することになる。もみという概念と、苗という概念とは、現実の上では発芽という関係で結びついている。しかし二つの概念を内容とは一応無関係に、ただ概念としての関係のみを言い表すことばでいえば、二つの概念は同じでない、互に「否定」の関係だということになる。否定の否定というような弁証法の一般法則は、要するに現実の発展関係をただ概念の関係として抽象しただけなのであって、概念が現実の存在に決定されてとる関係、概念の関係をあらわすだけで、現実の関係を何も言いあらわしてはいないのだ。従って現実の中に弁証法の一般法則を見るというのは、事実は思考概念に把握された現実の像の中に、思考が自分自身の姿、自分自身の展開法則を見ているにすぎないのである。であるとすれば、永田君が代表的に発言しているように、個別科学の特殊法則の比較、対照、總括によって、それぞれの特殊性をはらいのけた一般法則としての弁証法をひき出すというような帰納法まがいの仕事なんの意味もないことがわかる。弁証法の新しい一般法則の発見は、概念間の既知の関係では示せないような、すなわち、これまでわれわれが概念の関係をあらわすのに用いてきたどの言葉でも言いあらわせないような新しい関係を概念にとらせるような、そういう科学上の諸事実が発見されるときに行われるのであって、科学上の特殊法則の總括などから見出されるのではない。認識された現実世界の運動の中から、任意にいずれの部分をとっても、それを概念としての関係から見れば、すなわち概念の關係のことば、思考法則のことば、哲学のことばに翻訳すれば、いつでも弁証法の一般法則を確認することができるのである。そういう意味でのみ、それは自然と社会からぬき出された法則なのである。

いわゆる「世界の一般法則」としての弁証法が、元來概念の關係、思考の法則であるものを現実世界の法則との同

一性の面で抽象し、現実世界そのものの法則として評価し、表現したものにほかならぬとすれば、弁証法は思考の法則、概念的把握の法則、認識の法則として示されるのが、本来の示され方だということがわかる。これによって、さきにもおいておいた問題が解決される。哲学の対象を「世界の一般法則」としての弁証法とする立場は、思考法則の科学としての弁証法を包括しえない。これに反して、エンゲルスとともに、哲学を思考法則の科学、認識の科学としての弁証法とする立場に立てば、「世界の一般法則」の秘密はたちどころに分明して、哲学の下部部門に包括される。思考法則の一面を固定して、實在の法則の意味をもたせるのは、説明の通俗化の一つの方法にすぎない。いわば弁証法をかりに形式論理学的に説明してみせたにすぎない。それにとつては、個々の一般法則を個々の実例で証明することで問題はつきる。法則を運用しうるためには、それを「本質的に」明かにしなければならぬ。それはレーニンが重要な覚書「弁証法の問題」の中で指摘したように、認識の法則として明かにすることである。エンゲルスが、世界の一般法則の形における弁証法を哲学の対象とよばなかったわけもこれから分かる。エンゲルスは弁証法を「外界と人間の思考との運動の一般法則の科学」（『フォイエルバッハ論』四）に還元したのち、この二系列の法則は、表現上は異なると言っている。人間の頭はそれを意識的に適用するのだが、外界では無意識の中に外的必然性として無限の偶然事項をつらぬいてはたらいっているからだ。その場合、人間の頭の中で意識的に展開される思考の法則として認識法則として研究するのは哲学としての弁証法の課題であり、外界の弁証法的な一般的運動法則として明かにするのは実証科学の仕事であるとすれば、一般的な意味での弁証法は哲学のみではなくあらゆる学問の対象である。したがって、これらの弁証法が「実質的には同一」である側面から抽象して得た、対立物の統一等々といったような「世界の一般法則」は、それ自らとしては哲学でもなんでもない。しいて言えば、おもちゃの哲学、哲学の模型、思考規定を通俗的に理解させることによつて哲学や科学への橋わたしとなる論理的予備門である。それを研究の方法、発見の方法、認識の方法として運用しうるためには、「世界の一般法則」の形に低めら

れ、疎外され、模型化された法則を、思考の法則としての固有の形に高めなければならぬ。「一般法則」の形のまま現実に適用すれば、それは現実を整形する図式、現実の中から好みとの関係だけをぬき出して証明する図式になってしまう。問題は現実的対象を、それ自身の実証的関連がそこなわれないように概念の網の中へたぐりこんでゆくことにあるのだ。概念のあらゆる関係をあきらかにしつつ、そのために備えることにあるのだ。このあとの仕事こそ哲学の任務である。そして、エンゲルスがさきに引用した評論で暗示しているような風に、現実を（たとえば資本主義社会を）概念の関係の網の中へたぐりこんでゆく仕事そのものは、実証科学の高度な任務となる。この現実の実証的関連は自分にふさわしい概念関係を要求するのであるが、概念自身の方にも都合があつて、自分に許された本性にしたがつてしか対象を把握しえない。こうして、あらゆる現実的な科学的把握の現場から、思考の行程を独立にぬき出してきて、概念そのものの発展形態を思考の全範囲にわたつて明かにすることが哲学の問題となる。概念の発展としての思考に、それ自身の固有な法則がなければ、哲学は研究すべき対象がなくなつて消滅する。いや、思考そのものがなくなる。従つて現実の弁証法的把握もなくなる。経験論がそこへおちこんだように、思考は一つのまぼろしとなり、科学は現実規定の便宜的なつぎはぎになつてしまう。

哲学の対象としての思考法則の弁証法がエンゲルスによつて明確にりんかくづけられていることは、これまで見たとおりであるが、この点に実質的な一步をふみ入れたのはレーニンであった。弁証法は本質的には認識論、認識法則の科学として理解すべきであるというのが、レーニンの考えの根本である。レーニンは弁証法の核心が「対立物の統一」にあること、弁証法は対立物の統一の科学として展開されるべきことを、くりかえし強調している。これについては色々な解釈がおこなわれているが、一旦弁証法が思考法則、認識法則の科学としてとらえられたなら、このこは^{ママ}全く自明のこととしてあらわれる。なぜなら、思考の最も単純な要素としての概念の、その最も単純な関係といえ、概念は対象の否定であり、相互の矛盾において、しかも相互の同一性において成立する産物だからであ

る。エンゲルスは弁証法の一般法則を三つの法則に還元したまま、それらの相互の内面的関連に立入らずにおわつたが（『自然弁証法』下八二頁）、実をいえば世界の一般法則の形のままでは、個々にとり出しえても、本質的な関連はさぐり出せない。これらの法則をその本質としての思考法則へ統一するとき、概念の展開の中に関連があたえられる。そして概念の中に含まれた最も単純な関係としての「対立の統一」が核心となって概念の展開の中に他の諸法則、弁証法の他の諸要素が内面的関連をもつて開き出されて示される。レーニンのあたえた『弁証法の諸要素』も、特殊科学の法則の概括などからでなく、思考の法則（認識の法則）の分析からとり出したものである。多くの人々は、色々な科学上の実例を考察することによって、「一般法則」を関連づけたり、展開したりすることを試みているが、決して本質的なやり方とはいえない。そののみか、「対立物の統一」をすら「一般法則」的に、つまり対象法則的に、すなわち個々の実例によつて例証的に理解しようとする傾向がたよく見うけられる。そして、そのことが、レーニンの最も深刻な覚書『弁証法の問題』の眼目を人々に看過させたのである。

この覚書におけるレーニンの最も重大な発言は、『弁証法一般の説明または研究の方法』をのべて、『われわれは任意の定言（たとえば木の葉は緑である、イワンは人間である、等々）のうち、「細胞」におけると同じく、弁証法の一切の要素の萌芽をあばき出し、かくて人間の全認識にとつて弁証法が一般に固有であることを示さねばならない。』と言つたことばである。残念ながら、この仕事はまだほとんど行われていない。いや、このことば自身が十分に理解されていないのだ。レーニンは、エンゲルスの評論に示されたのと同じ仕方、資本主義の解剖を最も単純な「細胞」としての商品交換に含まれた矛盾対立のばくろから発展させる方法を説明したのち、それと比較しながら、人間の全認識をその「細胞」としての定言（判断・命題）に含まれた矛盾の発展から解明する道を指示したのである。これこそ、エンゲルスが哲学の対象、思考法則の科学としての弁証法として考えたものを明確に言ひあらわしたものに外ならない。ただ、エンゲルスがたまたま弁証法的思考について『概念の本性的研究を前提す

る』と言ったことから連想されるように、人間の全認識の「細胞」は、定言からさらに単純な要素としての「概念」に求めることができる。

任意の定言（または概念）から始めて、いわば螺線らせんをえがいて発展する、無限に増加する方面を有する認識としての弁証法という、このレーニンの考かんがえの根本が、これまでほとんど理解されなかったのには、多少わけがないこともない。レーニンは（手びきの説明のためにはある意味でやむをえないのだが）のつけからいきなり「統一物のうちに矛盾を認めること」を弁証法の眼目とのべ、弁証法を「発展一般の正しい見方」と解して、『世界の一切の行程を、その「自己運動」において、自発的発展において、その生き生きとした存在において認識する条件』として『それを対立物の統一として見ることを主張し、その証明に『資本論』においてマルクスのとった成功的な方法を説明している。そうしてのちに始めて「任意の定言から始める」弁証法一般の本格的な展開の方途を示しているのだから、うっかりすると、世界の一切の行程を「対立物の統一として見ることを」の正しさこそは、まさにそういう本格的な展開において基礎づけられなければならないことが忘れられるのだ。そして、これまで各自が弁証法を理解してきた習慣によって、あたかも世界の諸過程の個々の法則の比較から帰納されたものであってもあるかの如くごと表象されていたわけなのだ。レーニンは、その見方の正しさが『科学の歴史によって検証されねばならぬ』と言っていい。科学の歴史（もちろん哲学をも含めての）というのは、任意の定言から展開する人間の認識が最も典型的な形態をとってあらわれる場面である。しかしながら、科学が現象の各分野においてもっとも単純な関係を分析しつつ、それに即して新しい面を開き出しながら、次第に複雑な認識を達成してゆく仕方は、認識のもっとも端緒的な形態としての任意の定言、いなむしろ概念そのものの中にすでに基礎づけられているのだ。最も単純な規定からはじめて、次第に媒介的に対象を把握してゆくやり方、概念そのものがすでに矛盾の統一であって、自己の否定面を開き出しながら対象の把握をおこなうやり方、すべてこれらは概念の本性に根ざしている。単なる概念が判断（定言）

や推理を通じて、螺線らせんをえがいて多様に展開し、理論的な諸科学を成立させると、概念のその本性は、その科学の成果の中にはつきりと自己の姿を刻印する。こうして現実世界の内容が対立の統一による発展の姿として明かにされるのである。レーニンが手びきのためにのつけにかかげた説明は、単に概念（または定言）の本性をのべたものにすぎないのだ。

以上の発見は私には真実の啓示であつた。人間の全認識、思考の全範囲の法則を系統的に説明しようとする手さぐりのところみは、「概念の分析」という端緒をつかむとともに一ぺんに最終的な結著クワダに到達した。私はレーニンの覚書のはじめへ「今日始めてこの断片を理解した」と書きこんだ。一九三七年七月二八日、今と同じく咯血のために床に就いていたときであつた。十年後のいま、それを発表するのは私のよろこびである。しかし、同じ病の床にあつて、ただの手びかえとしてしか発表しえないのは私のかなしみである。

（一九四七・九・二八）

- 『加藤正著作集』第二巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。